

朝河史学を読む

— 日本史の三大革命と天皇制 —



矢吹晋

ご紹介いただきました矢吹でございます。

本会では前に二回お話をさせていただいたことがあります。一回目は教授になりたてのころ、中国が計画経済から市場経済に転換し、その方向がだいたい固まってきた時期のお話でした。二回目は大学をそろそろ定年で辞めるという時期で、中国がWTO(世界貿易機関)に入って中国経済がいよいよ国際化していくというお話をさせていただきました。

さて本日はまったく門外漢の歴史の話をさせていただいたので大変心もとないのですが、しかし、素人だからこそかえってよく見えるということもあります。も

し間違いがあったら後ほど訂正くださることをお願いして、ひとまず素人の話を耳を傾けていただければ幸いです。

標題「朝河史学を読む」にサブ・タイトルとして「日本史の三大革命と天皇制」を付しました。三大革命の一つは大化改新(六四五年)、もう一つは明治維新(一八六八年)です。明治時代にはこの二つを二大革命とする議論が各種あつたようで、その意味では朝河貫一(一八七三—一九四八年)だけの所説ではないのですが、しかしやはり朝河は朝河らしい議論を『大化改新』(邦訳柏書房、二〇〇六年)の「序章」で試みています。三大革

命のもう一つは戦後革命あるいは戦後改革(一九四五年)です。これを三つ目に数えていいのかどうか。長期的に見れば、むしろ明治革命の延長として考えたほうがいいのかもしれませんが。このへんは議論の余地があります。朝河は膨大な資料 *Japan Chronicle* (日本誌) を残していますが、彼自身は三大革命という言葉はしておりません。その点をあらかじめお断りしておきたいと思えます。

朝河とイエール大学

最初にイエール大学の話をさせていただきます。朝河は早稲田の東京専門学校を一九五五年に卒業して、ダートマス大学に留学します。そのあとイエール大学歴史学科の大学院で博士号を取りました。そのドクター論文が *The Early Institutional Life of Japan* 『大化改新』です。一九〇七年にイエール大学の講師に就任します。ですから今年には朝河就任一〇〇周年になります。それを記念して、イエール大学で *Asakawa Initiative* という名称を使ってイエール大学と日本との絆を強めようという記念のイベントが始まりました。その最初の企画として三月九日、一〇日に朝河記念シンポジウム「日本と世界」が開催されました。たまたま私は朝河のことを少し研究しているものですか

ら、冒頭にスピーチをする機会を与えられて大変緊張いたしました。

イエール大学が東アジアの学問をどのように築いてきたか、その概略を申し上げると、サミュエル(Samuel Wells Williams)という人物が東洋学の初代教授で、ペリー提督の通訳官でしたが、引退してイエール大学の先生になりました。彼は日本語より中国語のほうが得意だった。サミュエルの子供が二代目の教授フレデリック(Frederic Wells Williams)で、彼はあまり能力がなかったのか、助教授で終わりました。そのフレデリックに学位論文を指導してもらった形で博士号を取ったのが朝河です。朝河からイエールの否、アメリカ全体の日本学 *Japanology* が始まったとみていい。

「世界に向かい日本を紹介し、東西洋の相互の理解を助けるためにアメリカに残る」と日本語で書いた両親の手紙が残されています(『朝河貫一書簡集』所収)。ダートマスに留学した朝河は卒業後すぐに帰国する予定だったので、彼の帰国を両親は待っていた。ところが、タッカー学長が朝河を見込んで、ぜひイエールで博士号を取得して、ダートマスに戻って日本学を教えてほしいと頼むわけです。そこで朝河は父親にその旨を手紙にしたためました。イエールでは、その書簡を引用して今回のイベントのパンフレットをつくって

います (Yale-Japan, November 2005, Yale University 参照)。

イェールの「朝河一〇〇周年」行事の一つとして、「朝河ガーデン計画」があります。大学キャンパス内のセイブルック・カレッジに朝河は数年間住んでいました。その中庭の一角にちよっとした庭園をつくって「朝河ガーデン」と名付けようということでプロジェクトが動き出しました。私たちは福島県二本松市や安積高校OBを中心に朝河顕彰協会をつくっているのので、ここに何かモニュメントをプレゼントしようと考えているところです。

またイェール大学パンフレットの中に、コングレス・ライブラリー(米国議会図書館)の話が出てきます。朝河が最初に日本に帰国した一九〇六年に、イェール大学図書館から日本の書物を買うことを頼まれたのですが、同時に彼はコングレス・ライブラリーにも手紙を書き、もし必要なら日本学の基本的な文献を収集して差し上げたいがどうかと申し出ました。そこで議会図書館側も朝河にお金を渡して依頼しました。線装本や巻物の形の書物や史料は横に重ねるのが普通ですが、それではアメリカの図書館では扱いに不便なので、新たに硬い表紙を付けて特有の装丁をして縦に並べています。朝河コレクションは議会図書館もイェール大

学も同様です。イェール大学は、最初はスターリング図書館に置いておきましたが、一九六〇年代にバイネツキ・ライブラリーという稀覯本図書館ができてからは、そちらに移っています。その目録を見ると、かなり素晴らしいものが揃っています。

Asakawa Initiativeの一環ですが、東大とイェール大学の間ではいろいろな交流が始まっています。まず、双方のキャンパス内にそれぞれの出先事務所をつくってお互いの対外研究教育活動の便宜を図っています。

次はインターンシップ。近年は日本の大学でもかなり行っていますが、卒業後に就職を希望する学生が夏休みに行政機関や企業に行つて見習いをして、その仕事で自分に向いているかどうかを調べて就職判断をする仕組みです。イェールの学生が日本の企業を知るために東大のイェール事務所を窓口とする。来日中に、日本のビジネスの内側から企業を観察するというプログラムです。同じことはイェール側でも東大のために行われます。

朝河史学と朝河平和学

朝河の歴史学研究は平和学(私が仮に名付けたのですが)と密接に関係しています。というのは、朝河の生きた時代がまさに戦争の時代であったことに関係があ

ると思います。朝河は戊辰戦争でたたきつぶされた旧二本松藩の出身です。その後には日清戦争があり、アメリカに行つてドクター論文を書き上げるとすぐに日露戦争が勃発しました。しかし、アメリカの人々はほとんど極東の情勢を理解していません。そこで彼は「The Russo-Japanese Conflict (日露紛争)」という英文の本を書いて、どういう状況であるかということを訴え問題提起をします。

ポーツマス会議のときには、朝河はウェントワースホテルまで出向いて二週間ほど投宿し、オブザーバーとしていろいろな活動をしています。例えばアメリカの新聞 *Boston Herald* に対して、これは正義の戦争だから日本は賠償を取つてはいけない、というようなことを説いています。

ポーツマス会議前夜に、世論工作のためアメリカに行つた政治家金子堅太郎がハーバード大学出身で、ルーズベルトもハーバード出身ですから、ハーバード・コネクション云々ということばかりが語られてきました。しかしこれには裏があつて、ポーツマス交渉の舞台裏で精力的に働いたのは、じつは金子の随員の阪井徳太郎です。阪井とイェール大学の事務局長ストークス (Anson Phelps Stokes) はエキスコパル神学校のクラスメートで、この二人の極秘の話し合いに基づいて、

イェール大学の国際法教授ウールジイ (Theodore S. Woolsey) と、朝河の先生のフレデリック・ウイリアムス、そしてストークス事務局長との三人で、朝河の著書ベースとして講和条件の分析をした。それがいわゆる「イェール・シンポジウム」とか「イェール・メモランダム」と呼ばれるものです。そのことをイェール大学は大変誇りにしています。

日露戦争に勝つた奢れる日本は、夏目漱石が『三四郎』の広田先生に「日本は滅びるね」といわせていますが、まさにそういうことになる。そのような状況に直面して朝河は『日本の禍機』(一九〇九年)を書きました。これは朝河の唯一の日本語の本です。

朝河は早稲田の東京専門学校出身なので大隈重信は恩師に当たりますが、しばしば諫言しています。例えば、朝鮮併合に対しては、もし朝鮮が弱いからロシアに取られてしまうという懸念があるならば、「併合」の形では問題を解決できない。むしろ朝鮮の開発を支援して「独立」できるように日本は援助すべきであり、そのほうが朝鮮から嫌われることもなく、世界中から警戒されることもない、日本の安全保障にも真に役立つと説きました。さらに一九一五年に大隈内閣が行つた対華二一か条要求についても厳しく批判しています。

日米戦争の前夜には、朝河はルーズベルト大統領のために「親書案」を起草しました。ただ実際にルーズベルトが天皇に書いたものは、朝河が書いた草案とはまったく別なものでした。ルーズベルトは日本に最後通牒を突き付けたわけですが、その意味では朝河の努力は実を結ばなかったわけですが、彼は最初からこれは無理だと思っていました。ハーバード大学の美術史のラングドン・ウォーナー (Langdon Warner) がこの案を提起したのですが、それに対して朝河は、「方に一つも可能性はないと思う」が、「こういうアピールを天皇に宛てて、しかもそのことをマスコミに訴えておけば、戦後改革に有効なはずだから種を蒔いておく」ということでした (『書簡集』所収のウォーナー宛書簡)。

イエール大学における朝河の遺産はあちこちにあります。一つはバイネッキ・ライブラリーの朝河コレクションがあり、スターリング・ライブラリーにも「Asakawa Papers」という形で遺されています。スターリング図書館正面に顔泉卿の墓誌銘が刻まれています。九つの彫刻は楔形文字やヘブライ、ギリシャ、ラテン語等の古今の言語で九つの人類の知的遺産が記してあります。その中で朝河は顔泉卿の墓誌銘を選んだのです。顔泉卿は顔真卿のいとこで、安禄山の乱に際して、安禄山に抵抗して殺された。それを知

で、これからの研究を待たなければいけない。ただ、朝河は *Japan Chronicle* (日本誌) と名付けて膨大なカードを遺しています。中心は朝河の封建制の研究資料ですが、封建以前も含まれており、また近現代の一九四八年の死の直前までの資料が膨大なカードになっています。普通の図書カードの倍くらいのカードに、じつに小さな文字で丹念に書き、新聞記事なども細かく切って貼って整理して、さらにインデックスも付けられた貴重な資料です。

①朝河「大化改新論」(革命1)の核心

朝河によると、大化改新は唐から律令制度を導入する際、有効と思われるものは輸入したが、易姓革命の思想は拒否して、世襲の天皇制を中核に据える形で古代国家ができた。土地制度は班田收授制度があった。この制度自体はうまく機能せずに失敗したが、豪族の土地私有を改め、天皇あるいは国家に集中した点では成功した。ここで古代国家ができたことが封建社会の起点になる。

しかし古代国家は、土地を国家のものとしたものの、間もなく私的な庄園が成長して公田制は崩れていく。その庄園がどのようにしては、封土に変化したのか。その実証が朝河の中心の仕事になるわけです。

った玄宗の次の皇帝の肅宗がその忠義を讃えて言葉で贈った。それが画面に映っている五九文字です。これを朝河が英訳して説明しています。

「卿兄以人臣大節、独制横流或俘其謀主、或斬其元惡当以救兵懸絶、身陷賊庭、傍若無人、歴数其罪、手足寄於鋒刃、忠義形於顔色。古所未有、朕甚嘉之」(顔泉卿は、人臣の大節を以つて、独り横流を制し、或は其の謀主を俘とし、或は其の元惡を斬る。当に兵を救わんとして孤立し、身は賊の庭に陥るも、傍若無人、其の罪を歴数す。手足を鋒刃に寄せられ、忠義の顔色を現すは、古所に未だ有らず。朕(肅宗)甚だ之を嘉す)。

なぜ朝河があのように目立つ場所にこの言葉を選んだのか。その理由はよくわかりません。顔真卿の書で *calligraphy* として優れていることはわかりませんが、なぜ「忠君愛国」を謳うものを選んだのか。ドイツのナチズムの運命や満州事変の行方を懸念していたことは推測されますが、「朝河コードのナゾ」として皆さんに考えてほしいと思います。

日本史の二つの革命—大化改新と明治維新

さていよいよ本題に入ります。日本史における二つの革命ということを朝河は「大化改新」序章ではつきり提起しています。しかし第三の革命については曖昧

庄園の内部は実際にはその中身は変わってきても、例えば島津庄なら「島津庄」という言い方がずっと後まで残る。こうしてうっかりすると、平安時代の庄園と、後の足利時代の庄園の異質性が認識されな。つまり、は、封土として封建社会を支える土地制度になつてからの庄と、それ以前の庄とはつきり区別しなければいけない。中田薫教授(東大法政史教授)の庄園研究は、日本の庄園研究としては画期的だが、日欧比較の点についての問題意識が明確ではない。その結果、何となく日本では庄園と *manor* を安易に対比する時代錯誤の風潮が続いている。朝河が厳しく批判したのはこの点です。

②朝河「明治維新論」(革命2)の核心

次に朝河の明治維新論です。封建制は「大政奉還」によって終わります。明治維新によって主権は天皇に移り、中央集権の国家が再構築された。つまり最初の革命(大化改新)を起点として(媒介を経て)封建社会が始まり、明治維新を契機として近代国家が始まる。

その間が日本史における封建社会である、というのが朝河の基本的な考え方です。ただし、その間を鎌倉時代と戦国時代と徳川時代の三つに分け、典型的な封建時代は戦国時代である。徳川時代はすでに「ポスト封

建」に近く、「中央集権国家への移行過程」だと見ています。

土地については私有地として実質的な権利関係が固まってくる。問題は天皇の地位で、明治憲法で決められたように、天皇は主権者ではあるが、独裁者ではなく、受動的な主権 (passive sovereignty) であったと位置づけています。

③ 「戦後改革」論 (革命3) における天皇論

戦後改革について朝河は、有名な経済学者のフィッシャー (Irving Fisher) に手紙を送っています。フィッシャーは朝河よりも六歳年上で、一年早く亡くなっていますから、ほとんど同時代の人です。イエール大学教授だったので、非常に親しい付き合いをしていました。フィッシャーがいろいろのことを朝河に聞いてくるのに答えて、朝河は次のような手紙を書きました。一九四四年一〇月ですから、敗戦の一〇カ月前です。

「第一は、日本史上の重大危機に際して発生した大化改新と明治維新に共通する点は、主権者・天皇の認可と支持である。第二は、日本史上において天皇の支持を欠いたまま、あるいは天皇の名と切り離されて、政治上の重大な決定が行われたことはない。第三は、天皇の特異な地位を理解するには、天皇の主権は絶対的

だが、天皇自らの発意でそれを行使するのではないことを忘れてはならない。天皇は主権者ではあるが、専制君主ではない。

その説明として、天皇は枢密院の顧問官の進言を待ち、正規の国家機関を通じて行動するという特徴をもっている。天皇の passive sovereignty 受動的な主権という慣習には危険性も潜む。最近一〇年のように邪悪なる奸臣が地位を占めて、天皇の気が進まないにもかかわらず、その政策を押しつけることが一再ならず起きている。しかし、この事態は長続きしない。こういう一時的なことで問題を判断してはいけない」。

米国の軽薄な論調への批判

朝河は、日本の天皇の地位を説明した米国の「専門家気取りの人々」に対して、それらの天皇論と国民感情についての議論は「あまりにも的外れのことが多い」と批判しています。

具体的には、「にわか仕立ての自称設計者たち」が天皇制廃止を必要条件だとしているが、「米国の宣教師精神に基づいて休日の気晴らしのように処理できる問題であろうか」と、いろいろ勝手な議論をする人を occasional self-styled planners と揶揄しています。朝河自身は敬虔なクリスチャンですが、アメリカ人宣教師

の中にはこういう軽はずみな人も少なくないと批判しているのです。

フィッシャーは単にイエール大学の有力教授にすぎないのですが、じつはフィッシャーの友達のヘンリー・ルイス・ステイムソン (Henry Lewis Simson) が重要なのです。彼はフィッシャーと同年生まれ、イエール大学の同級生で、フィッシャーと頻りに文通しています。ステイムソンは陸軍長官や國務長官を務め、原爆のマンハッタン計画の責任者であるレズリー・グロウヴズ (Leslie Richard Groves) 准将を監督する立場にありました。ステイムソンは、ときには軍の意見を却下しました。例えば、グロウヴズから受け取った原爆の投下目標計画の中にあつた京都をリストから削除させています。ところで、この京都への原爆投下の話

に関してはもう一人のアメリカ人が出てきます。

それは前に触れたラングドン・ウォーナー (Langdon Warner) です。彼は朝河より八歳若く、夫婦で日本美術あるいは中国美術の研究をしていて、早い時期に『推古朝の美術』という研究書を出しています。その序文を朝河が書いています (拙訳『朝河貫一比較封建制』所収) から、二人の付き合いは相当古いことがわかります。ウォーナーは何かあると朝河にいろいろなることを聞いてくる。朝河は仏教についてはかなり深い知識をもっていました。自分が知らないことは友人の伊東忠太や関野貞など、当時の東大建築科の教授から聞いてウォーナーに教えています。その様子が、この「序文」からわかります。

ウォーナーは、京都や奈良への原爆投下計画に関し

東京堂出版

東アジア考古学辞典

西谷 正編 遺跡をはじめ遺物・用語・事項など広範囲にわたり最新情報を網羅した初めての辞典。2500項目を収録。四六倍判 21000円

難読・稀少名字大事典

森岡 浩編 難読・稀少と思われる名字14000を採録し、読み方と由来を解説した。音引き五十音順で簡単に引ける。菊判 7140円

パッチフラワー花と錬金術

東 昭史著 パッチセラピーに用いた37種の植物について特質・生命力・活用法などをわかりやすく解き明かした。A5判 2310円

南北朝遺文 関東編 全6巻

佐藤和彦編 関東八ヶ国を含め十四ヶ国の古文書を元弘三年～明徳六年まで6000通を収録したシリーズ。第一巻 16000円

レオナルド・ダ・ヴィンチの世界

池上英洋編著 自然科学・芸術・人と時代の三つに分け各分野の専門家がレオナルドの貢献と歴史的意義を詳細に解説。万能の天才が残した活動を克明に解き明かした決定版。A5判 3990円

(価格は税込)

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-17
TEL.03-3233-3741
http://www.tokyodoshuppan.com

て、第二次世界大戦中の米軍の Antiquities Division (戦地文化財救済委員会) や国務省ロバート委員会を通じて活動しました。そういう仕事の一番大事な部分で示唆を与えていたのが朝河でした。

朝河は敗戦直後にウォーナーに対して「長文書簡」を書いていきます。かなりよく考えて無駄のない、ほとんど論文のような手紙です。出版さえ考えていたのです。

もう一人のアメリカ人はシャーマン・ケント (Sherman Kent)。朝河よりも三〇歳若い教え子で、イェール大学でフランス中世史の論文を書いていました。日米開戦前夜、イェール大学の助教授のポストを捨て、COI (Office of Coordinator of Information) 情報調整局) に勤めましたが、この組織はすぐOSS (Office of Strategic Service) 戦略情報局) に改組されます。それが戦後にCIA (Central Intelligence Agency) になります。OSSのころはアメリカのあらゆる知性を集めて国際情勢を分析する組織でした。ハーバード大からはライシヤワー (Edwin Oldfather Reischauer) も動員されています。

ケントは戦後GHQとともに日本にやって来て、著書『Writing History』は『歴史研究の方法』という邦訳で出版されました。これは大学院の学生に対する歴

史論文の書き方のマニュアル本なのですが、日本では当時の状況のもとで盛んにもてはやされて再版も出まなかったと思います。朝河とケントは歴史的洞察力に基づいた国際関係の構築を追求する師弟関係にあったといえます。

そういった人物群のトップに君臨したのがウィリアム・ドノヴァン (William Donovan) です。イェールのロースクール出身の有名弁護士で、彼がOSSをつくったのです。その意味ではアメリカの国策情報研究・対外政策の実行と、イェール大学はかなり深い関わりがあることがわかります。

朝河と同時代の歴史家たち

次に、朝河と同時代の日本の歴史家のお話をします。辻善之助教授は、当時、史料編纂所の所長で、一九二九年に朝河の『The Documents of Iwaki』『入来文書』が出版されたときに新刊紹介を書いています。この本の日本語部分は入来院の古文書を起こして、そのまま日本語で書き写したのですが、辻は東京で印刷する手配をしました。

三上参次は、辻善之助の後任の史料編纂所所長です。イェール大学のために図書二万冊、議会図書館のため

に四万五〇〇〇冊を選ぶ協力をしています。

黒板勝美教授については後に述べます。三浦周行教授は、朝河が史料編纂所に留学したときの仲間ですが、その後、京都大学に勤めています。

牧健二教授は、三浦周行の京都大学での弟子筋に当たり、京都大学法学部の『法学論叢』に『入来文書』の書評を書きました。これが日本語で書かれたほとんど戦前唯一のまともな書評です。ヨーロッパではフランスのマルク・ブロック (Marc Bloch) やドイツのオットー・ヒンツェ (Otto Hintze) などのトップクラスの歴史学者たちが書評を書いています。日本では完全に無視されたのです。

竹内理三教授は朝河史学を評価していますが、原文は読んでいないようです。

堀米庸三教授は戦後、原文を読んで、著書『歴史の意味』で評価しています。

永原慶二教授は当時、史料編纂所において日本で復刻版を出したときの編集委員会の一員で、入来にも調査に行っています。しかし、その後書かれた研究報告書の中には、朝河の名前は不思議なことにまったく出てきません。私の理解では、彼の考える日本中世史と朝河のそれとは根本的に違っていたことだと思います。

石井進教授も非常に若い時期に永原教授に同行して入来調査を行っています。

山口隼正教授は史料編纂所に勤めたOBですが、今年(二〇〇七年)三月『日本歴史』で、私の訳本の書評を書いてくださいました(私は門外漢ですが画面のように、『大化改新』『入来文書』『比較封建制論集』の朝河三部作を翻訳しました)。

論点①朝河対黒板勝美教授

黒板勝美教授は朝河とほとんど同世代の歴史家です。朝河が『The Origin of Feudal Land Tenure in Japan』という論文を『The American Historical Review』に書いたときに、『史学雑誌』(第二六編第三号)にすぐ紹介文を書きました。ところが、これが朝河の気に入らなかつたようで、朝河はすぐに『日本封建制度起源の拙稿につきて』という反論を『史学雑誌』(第二六編第六号)に書いています。その中で、外国で日本史を研究することには次のような意味があるといっています。

「海外の研究者は内国にて及び難き思想の自由あり、比較の着想を錬磨する便あり、材料の量は劣るとも特殊の長所を養うの利あり。……願わくば日本史の中より貴重なる宝玉石を世界人類の発達史に向いて貢献するを

得んか」。

つまり、日本史というのは世界で稀にみる非常に素晴らしいものをもっている。それは中国文明という大きな文明の周辺にあって、短期間にいいものを咀嚼して発展させていくという素晴らしい伝統があって、これはほかの後進国が近代化をする上で非常に参考になる。それは日本史の宝物であって、世界人類に貢献するような日本史を書かなければいけない。ところが日本では制約があつて、外国にいたほうが書きやすいという現実がある、といっています。

論点②島津初代「忠久の生い立ち」伏字問題をめぐつて

朝河は一九三九年に、「島津忠久の生い立ち」という論文を立教大学の『史苑』（第一二巻第四号）に書いています。日本語で書いた最後の論文で、非常に長大なものです。東大が所蔵する国宝級史料は島津家文書だけだと聞いたことがあります。島津家文書が重要な文書であることは間違いない。それを一番よく読んだのは、朝河かもしれません。というのは、入来文書と島津文書はいわば対になっているからです。

伏字の話をしますと、私はこの翻訳（朝河實一比較封建制論集）に間に合わなかつたので、この中では伏字

よつと別です。ところが、「只独り島津家系のみが、己の出自を誇らんために、この背信、破廉恥の汚辱を憚る所なく頼朝の面上に投じた」と、朝河は島津藩の公認伝説を批判しています。

つまり、島津初代の忠久が頼朝の落とし子だという説、母親は丹後内侍だという説は朝河にいわせると、きわめておかしい。丹後内侍は盛長の妻であり、頼朝が自らの忠臣の妻を寝取ることがあり得るか。島津家としては「頼朝の直系」ということを宣伝したいためにそういう伝説をつくるのだが、その伝説は客観的に見れば、己にツバするものではないかと朝河は説いています。

「恩者、忠徒に対して感荷の情の懇誠なるを記される頼朝が、果してかかる悪行を犯すほどに賤しき人物であつたらうか。かくの如きは武士の棟梁たる名將が誰とても敢て行わざるべき種類に属する。まして「天下草創」の大業を行うを自ら意識せる頼朝が、かかる陋行あつて如何にして多数の御家人を統制して彼が如き信頼忠勤を得たであらうか」と批判しています。

「兼ねて伝説は政子が他婦に対する恕し得べき妬心ありしを誇張して、孕女を殺さんとする夜叉たらしめた」。

これは頼朝が私生児を妊娠させたときに、政子に殺

のままにしました。ところが今回、三日間イェール大学図書館に通つて、ついに、伏字を起こした部分を発見することができたのです。朝河は自分の資料は丹念に整理する性癖がありましたから、私は絶対に存在するはずと確信していました。ただ、この論文の抜き刷りは、Asakawa Papersの「印刷されたもの」というボックスにタイトルなしでまとめて入っていたので今まで気づかなかつたのですが、今回調べてやっと発見したので。検閲でなぜ伏字にされたかという、先ほどの思想の自由と関係があります。

抜き刷りを朝河は早稲田大学図書館にも寄贈した。それには朝河が書き込んだり、直したりしている個所があります。しかし、当然のことですが、伏字を起こすようなことはしていません。私はどうしても伏字が気になるので調べたわけです。ではどこが消されたのか。

「東鑑」は頼朝に情婦があつたことを数度記しておるも、他人の妻を犯したこと、なかならず恩誼深き忠徒の妻を私した罪悪を頼朝に寄与することは『東鑑』のみならず他書も他家の系も示さぬ所以である」。

情婦がいること自体は当時の習慣からいって許されることですが、自らの忠臣の妻を寝取るといふ話はち

されそうになつて住吉神社に逃げ、雨の降る晩、そこで産み落としたという伝説ですが、「たとい薩州にて頼朝伝説を作つた初めには盛長の存在を知らなかつたであらうと仮定しても、後に吉見系、尊卑分脈、東鑑等を知るに至つても、伝説を棄てざるのみか」以下が伏字になっています。「猶も久しきに互つて弥が上に之を修飾しつ」というところが消されています。

「猶も盛長を抹消し、猶も武家政治創造の偉人に寄せた汚辱を主張したるは驚嘆すべき事実とせねばならぬ。殊に此伝説のみが此事を敢て為したことは如何に弁じ得るのであらうか。而して之がために併せて自家の源頭を濁泉たらしめたことは自ら招く所なりとはいへ、喜ぶべきことであらうか」と批判しているわけです。

次に「忠久は以仁王もちひとの落胤だという伝説」がつくられる。頼朝の私生児伝説というのは、結局は入来院との関係だと、私は考えています。入来院は元来、東京の渋谷辺りも領地だつたわけで、姓は渋谷氏です。武蔵野・相模にいた一族の五人兄弟が鎌倉幕府によつて薩摩の地頭として派遣されたわけです。渋谷氏はもともと桓武平氏の子孫ではあるけれども、関東武士団として根を生やしていますから、武家社会の人間として誰からも認められていた。ところが、島津庄は元来、

近衛家の庄園であり、島津忠久はいわば近衛家の番頭だった。ですから、京都の文化を身につけた旧社会の人間だったので。忠久は賀茂神社の祭司を務めたこともあり、有職故実に通じ、和歌をつくるのが巧みでした。ということは、彼は決して関東武士ではなく、京都の貴族社会の周辺の人間だったことは明らかです。だからこそ、時代が武家社会に転換するときには自分は関東方、頼朝方だと強調せざるを得ない。それで「頼朝の隠し子」だといってきた、と私は解釈します。朝河はそのような断定的言い方はしませんが、そのように読みとれます。

ところが「頼朝の隠し子」だとすると、誰に産ませたかという話になって、それが忠臣の妻を寝取った話になるわけです。武士道の道徳を評価する朝河からして、そんなバカなことがあるかというのが朝河の伝説批判です。

以仁王の落胤話には損得両面があります。第一に自家の出自を徳川家に対抗するために天皇家と縁続きだとい出したこと。そうすると、忠久の誕生を一五年ほど遅らせることになって、他藩の学者から非難された論点を回避できる。さらに頼朝が忠臣の妻を犯したとする無恥破信の冤罪が晴れる。寝取られた盛長も名誉回復できるというメリットがある。しかしながら、

論点③陽画としての「入来文書」、陰画としての忠久伝説批判

朝河はそれぞれの伝説が関連する史書と比べて、どのような矛盾があるかを徹底的に追及しています。そこから読み取れる結論は次のようになります。

薩摩・大隅・日向三国からなる島津勢力は、日本社会全体を貴族社会から武家社会に転換する上でのテコとなつたと見ることができ。例えば、足利幕府は直接的には九州において足利側が勝つたことで成立した。もし負けていたら宮廷勢力が復活したかもしれない。そういう文脈で、九州こそが歴史的転換の中心軸になつたと、朝河は見ています。朝河は入来院という一ファミリーのことやその裏としての島津藩のことを詳しく調べたけれども、それは決してファミリー・ヒストリーあるいはローカル・ヒストリーを書くためではなく、日本全体の歴史の転換基軸としてとらえている。京都側と武家側との対抗の中で、次の武家社会の中心的勢力になっていく武士団の一つとして入来院を挙げ、他方旧勢力から逆に武家社会のリーダーに転換していく島津を対比的に描いている、というのが私の理解です。

朝河はそういう乱暴な括り方をしてはいけませんけれども、彼は「南九州の封建制について」という本を書

伝説はマイナス面も免れない。何よりも、「再び論ずるまでもなく、従来の詳しい頼朝伝説が、嘘であったと白状したことになるし、更には良心の呵責、再び他人の律儀を犠牲として根もなき自家の美名を買はんとする事であらねばならぬ」、この部分が伏字になっているわけです。

朝河は、「前には創物の將軍(頼朝)に不信義の汚名を寄せ、今は進んで末路惨憺たる一王(以仁王)に冤罪の悲哀を加へたる。たとへ我は眼眩んで此情を忍んでも、他人の賛同は期し得ぬであらう」と、島津流の頼朝伝説には無理があると批判しています。

これは一九三九年、日本が皇国史観でどどん神がかりになっていったときに書かれたものです。私の見方では、「入来文書」はポジティブに史料を整理した封建社会の発展を示すドキュメントですが、入来院は「地頭」にすぎず、薩摩では島津が「守護」をしていた。入来院への対抗上生まれた島津忠久伝説は日本史上「最大最長」のものと同様に朝河は形容します。最長とは、鎌倉時代の初期から明治まで繰り返してバージョンが新しくなっていたという意味です。

くと何度も予告していましたが、結局それは書かなかつた。次の課題に関心が移っていったようです。

論点④正閏問題に悩む三上参次を慰める朝河

朝河と三上参次の交流ですが、三上は文部省教科書をつくる指導的立場にあつて、南北朝の政治問題で悩まされていた。朝河は三上に宛てて慰めの手紙をたくさん書いています。

要するに、宮内省では北朝を正統としていたが、第二次桂内閣の上奏は南朝を正統とした。ところが教科書のほうでは喜田貞吉は両方並列していた。そのことがやり玉に挙げられて喜田は解任され、三上も辞任した。そんな状況に対して朝河は、「日本学界のために嘆息し、御苦衷のほど御推察申し上げ候。此事に限らず日本にては未だ事物の真を語るを憚る趣相見え、嘆息此事に候。いずれの国にもかくのごとき事情なきにあらず候ても、日本ハ所謂文明国中最もこれが多き様ニ存じ候」と、日本には「歴史を書く自由がない」と慰めています。

さらに、「国体および政治に関する部に最も慎重の態度も徐々に真を現はざるべからず、真ならざることには決して永久なる能はざることを、史の証するところに候へば、いつまでも真を蔽はんとするハ、急劇の破裂

を招くゆえんにして国の為にも忠なるものといふべからず」と書き、それは決して真の忠国ではないと断言します。こういったところに朝河の歴史についての基本的な見方が出ていると考えられます。

その前にも、「私ら海外ニ在つて日本の史を論著するものは、日本の旧思想等に掣肘せられざる利便あるを感じ候。欧文に書候事は少しも日本諸学者の注意を引かず、なんらの手応えもこれなきは呆るる所に候へども、世の識者(欧米)の参考に供し得候」と書いています。やはり相手にされないので不満だったようです。朝河は日本でも「自由に書ける」状況が欲しいと「思想の自由」を強調しています。そして「日本読者のみの独り合点の見地を離れて、人類社会発達の法式といふ見地よりせざるべからず、これ論著の性質より来る一良結果に候」と述べ、人類社会発展の方式、世界史に貢献する日本史、そういう日本史でなければいけないというのが、朝河史学の核心です。

朝河の遺産 Gifts of Yale Association of Japan

いわゆる朝河コレクションの一部は、イエールの日本卒業生たちが寄付したものです。大久保利武会長以下、イエールのOBたちが一九三〇年代当時の金で三万円の寄付を集めました。その資金をもとに黒板教授

が日本文化・歴史研究に必要なものとして、お経や庄園文書、古地図などを買いしました。ただし、日本に一つしかないものは、もち出さずに書写して贈りました。その点で学術資料の扱い方の見識がはっきりわかります。

最後に

前述のように史料編纂所の山口隼正教授が書評を書いて私の翻訳を紹介してくださいました。彼は入来町出身で『入来文書』を一番よく読んでおられる方です。その山口教授から、この本によって朝河のモニユメント的作品が広く読まれるようになるだろうと書いていただいたことで、実はほっとしました。

私はイエール大学でのスピーチで、*The Documents of Inaba* は日本で戦後、再版されたにもかかわらず、まったく読まれていないのはなぜかということをお話しました。

一つは、再編集の仕方が朝河の意図を決定的に取り違えている。朝河が「編年体」で並べたものを元の所蔵者別にしてしまった。さらに、朝河が捨てたものまで拾い入れた。これはせっかく朝河が整理した宝物を反古の山に戻したに等しい。

もう一つは、唯物史観学派の問題です。朝河は「中

世日本には農奴はいなかった」と主張します。ヨーロッパは三圃制度で、領主が指揮命令しな土地の割り替えができない。しかし日本は水稲耕作で年貢の量が決まっていたから、自分の努力で収量が増えた分は自分のものになるシステムでした。だから、水呑百姓の貧乏小作人でも「あたかも経営者のように」働いた。これは決して農奴ではない。朝河はそれを徹底的に実証しています。朝河史学は封建的な農奴制があったからファシズム政治が行われた、という議論とは逆です。

大化改新について、今年の二月にNHKが「大化改新 隠された真相〜飛鳥発掘調査報告〜」という番組を放映しましたが、あの内容はまったく間違いだと思はれています。「大化改新はなかった」という「大化改新虚像論」が戦後の学界の中心で、それをまとめたのがあの番組です。考古学の発掘成果はむしろ『日本書紀』の記述を裏付けていると見るべきでしょう。朝河は神話や伝説にも何らかの真実があるはずで、そこを読み取らなければ古代史は書けないと、『古事記』や『日本書紀』を徹底的に読み込んでいます。私は付け焼き刃で素人勉強しただけですが、素人の目で見ると、戦後の日本史学は全体として相当ゆがんでいるように思えます。

結論になりますが、朝河の歴史学は戦前は「右寄りの皇国史観」によって、戦後は「左寄りの唯物史観」によって無視された。日本史家は『入来文書』を古文書として読んでいても、朝河の英文は読まなかった。朝河の貢献は英文の史料解題と脚注に示された古文書の解釈にあるのですから、これを見なければ朝河史学は理解できない。朝河は祖国では日本史家とヨーロッパ経済史家の双方から認められなかったのです。しかし朝河史学はいずれ復活するに違いないと信じております。

ご清聴有難うございました。

(横浜市立大学名誉教授・朝河貢一顕彰協会代表理事・東大・経・昭37)

(本稿は平成19年3月20日午餐会における講演の要旨であります)

学士会館本館は

七月三十日〜八月十九日閉館

学士会館本館は七月三十日(月)から八月十九日(日)まで、館内の改修工事を行うため閉館いたします。ご不便をおかけいたしますが、何卒ご協力をお願いいたします。